

趙開美『〔翻刻宋板〕傷寒論』の問題

真柳 誠

茨城大学大学院人文科学研究科

明の『仲景全書』（以下、『全書』）に前付の趙開美「刻仲景全書序」（1599）には、張仲景『金匱要略』（『金匱』）と成無己『注解傷寒論』（『注解』）の彫板後に宋板の仲景『傷寒論』を入手したので合刻し、宋雲公『傷寒類証』（『類証』）も付録した、とある。しかし開美の『〔翻刻宋板〕傷寒論』（『翻宋』）が宋版の旧をどの程度保持しているかは、従来ほとんど検討されていない。

開美の『脈望館書目』と父の『趙定宇書目』は蔵書の宋元版に宋板・元板を付記するが、宋板『傷寒論』は著録されない。ただし『全書』自序に「復得宋板傷寒論」、総目録に「翻刻宋板傷寒論」、巻末の多くに「世讓堂／翻宋板」などが明記される。『翻宋』の書頭には北宋治平2年（1065）に大字本を施行した高保衡ら列銜とともに、元祐3年（1088）の小字本施行文と関与した官吏の列銜があり、これらは『翻宋』以前の記録にみえない。『翻宋』には南宋に始まる丸→圓の嫌名改字や、薑→姜の当て字もみえない。したがって開美は北宋の小字本系を翻刻した、ともおもえる。一方、宋諱の欠筆や版心の刻工名が一切なく、いわゆる仿宋版ではない。そこで『翻宋』さらに『全書』の諸面を検討したところ、開美による以下の付加ないし改変をみとめた。

『全書』総目第一に『翻宋』の篇目を羅列した①総目を付加するが、仿宋版『脈経』・吳遷本『金匱』と現『甲乙経』からすると、10数巻以内の北宋版医書に総目はなかつたろう。毎巻頭の書題下でも②「仲景全書第幾」を付加する。撰編者の林億は「臣林億等校正」（南宋版『千金方』）と記すべきだが、「宋」を付加した③「宋 林億校正」に改める。その以下には④「明 趙開美校刻」なども付加する。本文には⑤句点を刻入するが、管見の及ぶ宋元版にはなく、明後期から徐々に流行し、明末清初から刻入が一般化する。声調で字義がことなる破読字には⑥声点を付刻するが、同例は管見範囲にほとんどなく、むしろ宋版にはありえない。鄧珍本『金匱』は半葉13行・行24字だが、これを底本とした『全書』本『金匱』は⑦10行・行19字に改変している。宋代の小字本医書は半葉12行・行24字（大字本は8行・行16～18字）が標準と推定されるので、『翻宋』も⑦の版式に改変していた。以上の①～⑦は『全書』の4書に共通し、半葉巨郭もB6弱で統一されている。

管見範囲の宋版医書は条文毎に改行し、条末が行末にあって次行の別条と区別できなくても無視する。ところが『翻宋』は条末が行末になる5-8b-2・6-2a-10・7-10a-3・9-3a-3・10-9b-7・10-10b-2で、符号⑧「L」を条末下に付加して区別する。脱文の補入などで条末の余白に次の条文を取りこんだ2-5b-4と2-5b-10では、条文間に符号⑨「一」を付加していた。いずれも開美によるだろう。

『全書』の『翻宋』『注解』は処方条文末尾に通し番号を篇毎に付記し、例外を除き両書で一致する。北宋では『傷寒論』の処方番号への言及がどうもみえず、南宋初期の許叔微『本事方』『傷寒九十論』（1132～42）で処方条文に「第幾証」と記し、『全書』の番号とほぼ一致していた。番号は北宋小字本を南宋初期に覆刻した際の付記かもしれない。処方の証を病門別に類編した『類証』（1163）の処方番号も一致していた。なお北宋版にもとづく成無己本来の『注解』に番号がなかったことは、『注解』の元版2種にないことでわかる。『全書』本『注解』の番号は『類証』と完全に一致するので、開美が『類証』から付加したのだろう。

『翻宋』の各篇では、篇題と本文の中間に⑩低一格で処方条文が抜粋され、文末に「第幾」と小字双行の〔幾味〕が付記される。類例は他医書にないので、『類証』で検索した処方の原文を即座に一覧できるよう、開美が付加したらしい。小字本を南宋初期に覆刻した際に付加してもいいが、うまく理由を説明できない。以上の改変をくわえたのが『翻宋』だった。